特集 個性あふれる肴町

アーケード誕生から30周年

昭和58年10月、北上に続き県内で2番目となる全蓋アーケードが肴町商店街に完成しました。盛岡にも新幹線が開通、全国的に町並みの近代化が進んでいた時代。開町300年の老舗商店街にとっては、未来への存続を賭けた攻めの戦略でした。30年の時を重ねた今、肴町商店街はアーケードを活かした個性あふれる通りへと育っています。

現在の肴町アーケード（上）と昭和50年代（いさごだ前～みかわや方向）の肴町（左）

街の未来をかけた事業

『私たちの住んでいるこの街は、私たちの街でなく、この土地で生活している人々のための街にしたい。だから私たちの街は〝新しい文化に出合う街〟にしよう』。

これは、30年前に掲げられた肴町商店街の街づくりビジョンの一部です。近代化事業の核となるべく進められた全蓋アーケード建設には、文面に綴られた通り商店街の人々の強い思いがありました。

アーケード完成は昭和58年10月。しかし、新しい街づくりへの声は、その10年以上前から高まっていました。昭和48年には大手スーパーダイエーが大通りに出店し、肴町では「肴町300年祭」の開催に向け若い世代を中心に動きだしたのです。

「商売の中心が大通へと移るなか、肴町の若者たちは、起死回生の思いで『300年祭実行委員会』をつくって祭りを行ったんですね。それ以前は町内会ごとの関わりはあっても、肴町全体が結束することはなかったようです。実は、祭りの実行委員会がベースとなって後に結成されたのが4S会。次いで昭和50年には『盛岡肴町商店街振興組合』が法人格団体になり、肴町は新しい組織でスタートした時期でした」。

盛岡市肴町商店街振興組合理事長・豊岡卓司さんは、そう話します。

組合活動が始まった頃の情熱があってこそ、今の肴町商店街があると豊岡さん

若手が中心となって動きだす

その後、盛岡肴町商店街振興組合では、近代化事業の一環として全蓋アーケード建設計画に取り組みはじめます。アーケードに関する法規制の勉強、先進地視察、計画の策定や見直しを重ね、行政や関係機関と何度も協議したとのこと。豊岡さんは、その中心で動いた一人である斎藤洋祐さん（元盛岡市肴町商店街振興組合理事長）から当時の様子を聞いていました。

「全国どこを見ても、駅からこれほど離れた商店街で全蓋アーケードをつくった前例がなかったようです。その頃、川徳が菜園に移転すること

になり、肴町独自の個性も必要となってきた時期でした。当時の理事長だった斉藤さんは、ここで諦めたら二度とチャンスはないと市役所の担当者に積極的に働きかけ、商店街も行政関係者も毎晩手弁当で集まり、計画案の作成に力を注いだと聞いています」。

盛岡の事業者にとって、冬場の雪かきは否が応でもやらざるを得ない業務の一つ。大雪の朝仕事は雪かきから始まります。全蓋アーケードをかければ本来の仕事に集中できるわけですし、誘客効果も大きいといえます。しかし、商店街の店舗数は100軒以上。業種も幅広く、「アーケードなど必要ない」という声もあり意見集約は大変でした。理事長はじめ関係者一同で一軒ずつ事業の説明をし、賛同をあおぐ地道な活動を継続しました。

全蓋アーケードは、冬の作業を大幅に削減することになりました

全天候型イベントで人を呼ぶ

そして昭和58年10月、全長365メートルに及ぶ全蓋開閉式ドームのアーケードが完成。屋根には融雪装置を設備、アーケード街の中央には昭和初期に街を照らした「すずらん灯」を復元。新しい街にふさわしい愛称を募集し、「ホットライン・サカナチョウ」に決定しました。

近代的な設備によって全天候型イベントを開催できるようになった肴町では、徐々に目玉企画が増えてきました。「ちびっこ王国」「ハロウィーンフェスティバル」「クリスマスパレード」など、今では肴町の代名詞と呼べる企画が数々定着しています。昔から盛岡の夏行事として盛大に行われていた七夕祭りも、アーケード設置を機に一層パワーアップして開催されるようになりました。

平成13年には、屋根の老朽化対策と新しいニーズ対応のためリニューアル工事を行い、昇降型の照明を設置。その梁を使った「フラッグアート」も今や肴町の名物イベントです。「もう20年近く続いています。ホテルで使わなくなったシーツを無償で提供してもらい、文具店からは画材を提供していただいた。経費がかからないのが継続の大きな理由ですが、年々芸術性も高まっています」と豊岡理事長。

盛岡の秋の風物詩となったフラッグアート

自主事業以外にも発表の場として使わせてほしいという希望が多く、住民参加型の企画が増えているそうです。

街に生まれた個性を次に活かす

現在もアーケード内に店を構える「プレタわかまつ」の若松裕幸さん（肴町商店街振興組合副理事長）は、長く街の様子を見つめてきた一人です。

今後は、遠方客を呼び込む力となる「ななっく」にも、長期的な期待を寄せる若松さん

「30年前は景気も良く、肴町の通行量も最高で2万人に達したこともあった。時代は変わりましたが、アーケードのある肴町はお客さんの回遊性が高く、時間帯に関わらず歩行者が多いんです。しかし、300年祭やアーケード建設を機に継続する4S会や組合の活動によって商店街全体の結束ができた、そのことに感謝しています」。

アーケードという設備は、再び改築やリニューアルによってカタチが変わる可能性があります。しかし、30年前のアーケード建設によって育まれた「肴町の個性」は決して他の商店街にはないもの。それを継続する原動力は商店同志のつながりといえるでしょう。

今後の展開を豊岡理事長に伺いました。すると、肴町アーケード商店街をイベントの軸にしながらも、中津川を活かして回遊性を高めていきたいとのこと。肴町を抜けると、赤レンガ、盛岡城址と続き、反対側には八幡通りがあります。盛岡の歴史と文化を融合する場所である肴町。アーケードの入り口には、同町出身の中村誠さんが手掛けたマークが掲げられています。風車のデザインは、まさにこの街を象徴するもの。いつでも新しい風がこの街から吹いていく―。そんな願いが込められています。

取材／「SANSA」企画編集委員会

■取材協力／盛岡肴町商店街振興組合　TEL.019-625-1515